

統語面から見た現代標準アラビア語における法動詞の主語

—*yumkinu* の事例から—

後藤智明

elessar1014@yahoo.co.jp

キーワード： 法動詞 非典型的な主語 主語

要旨

主語の定義としては、(ア) 格変化、(イ) 述語との一致、(ウ) 統語的性質の三つが主として用いられている。このうちどれを重視するかについては、対象とする言語や、学説によって違いがある。印欧語について言えば、大まかに言って伝統的分析では、(ア) 格変化、(イ) 述語との一致を重視し、対して現代言語学一派である非典型的な主語学説論者は、(ウ) 統語的性質を重視する。しかし現代標準アラビア語研究では、(ウ) を重視する非典型的な主語学説論者は基本存在しない。その理由としては、(ア)、(イ) を満たさないが、(ウ) では主語といえる非典型的な主語の存在が、現象として現代標準アラビア語に存在しないとされているからである。現代標準アラビア語の主語について扱ったAbdul-Raof(1998)でも、主語の性質として最も重要視されているのは(イ) の述語との一致である。Parkinson(2008)では、動詞との一致が起こることを根拠に、*yumkinu* “可能である” は、動名詞や補文節が主語と述べている。しかし、前提である現代標準アラビア語の主語に、非典型的な主語が見られないという現象記述は、筆者によれば疑わしい。後藤(2014)およびその後の筆者の2014年の調査に従えば、実際には現代標準アラビア語にも非典型的な主語の現象が見られる。*yumkinu* “可能である” は、3の統語的性質からすれば、行為者と動名詞・補文節の双方に主語性が認められ、かつ行為者の主語性が動名詞・補文節の主語性より顕著である。この現象がある以上、これまでの研究のようにアラビア語の主語は(ア) 格変化、(イ) 述語との一致を見れば十分とは言えず、変わって(ウ) 統語的主語性を重視する非典型的な主語学説論を現代標準アラビア語にも適用すべきことを主張する。

1. はじめに

1.1 英語における主語

今回の論文の主眼は、可能法動詞*yumkinu*で、述語との一致を考えると動名詞・補文節が主語といえるが、統語論的に見ると第一に行為者項、続いて動名詞・補文節項であることから、現代標準アラビア語に非典型的な主語が存在することを主張し、現代標準アラビア語の文法記述に当たっての主語定義を、統語的性質中心に変更すべきであることを示すことである。そのためまずは現在までの主語の定義について述べる。なお、ここでいう主語とは、文法的主語であり、情報構造上の主題や、意味役割上の行為者を含まない。

文法的主語項の一般的性質について以下に筆者の考えの元分類する。

(ア) 形態論的主語性
主語に代入される語が、格変化を有する場合、主語特有の格を持つこと。

(イ) 述語支配主語性
述語の形態が主語に代入される語の性質に一致すること

(ウ) 統語的主語性
構文操作に当たって主語が示すさまざまな性質で、例として語順、繰り上げ、同一指示主語連続時省略可能性、動名詞句化など

Huddleston & Pullum (2007)と、渡辺(2009)の記述を参考に、英語の主語を例にとり、その示す性質を、筆者が上記の分類、(ア) 形態論的主語性、(イ) 述語支配主語性、(ウ) 統語的主語性の三つに分類して提示する。なお、本論文の例文は出典がない場合、すべて筆者による作例である。

(ア) 形態論的主語性

Huddleston & Pullum (2007:99-100)によれば、英語の主語の持つ性質として、格変化がある代名詞であれば主格でないと主語になれないことがある。そうであるので(1)で、主語である代名詞 *I* は主格をとっている。これを(2)のように対格の *Me* に変えると文として不適切である。

(1) *I am a person.*

「私は人間だ。」

(2) **Me am a person.*

「私は人間だ。」

(イ) 述語支配主語性

Huddleston & Pullum (2007: 100)によれば、英語の主語は、述語を支配する。述語を、*He* と対応した *is* でなく、*I* に対応する *am* にすると非文である。

(3) *He is a person.*

「彼は人間だ。」

(4) **He am a person.*

「彼は人間だ。」

(ウ) 統語的主語性

繰り上げ構文適用可能が英語の主語の統語的性質の一つにある。渡辺(2009:104-107)によれば、ある文の主語は、それを *that* で導かれる補文節の中に入れて、法動詞 *seem* と形式主語 *it* を使った法性標示構文を作った際、そこからさらに主節の法動詞 *seem* の主語へと繰り上げ

ることが可能である。Huddleston & Pullum (2007:335-340)は、これを主語の性質として挙げてはいないが、この現象があることは触れている。

以下に最初に示した(6)に法動詞*seem*を使って、法性の意味を付け加えると二番目の(6)になる。さらにそこから繰り上げを行った文が三番目の(7)である。主語*He*のみが、法動詞*seem*により繰り上げの適用を受けうるので、別の項*Cakes*を繰り上げた四番目(8)は非文である。

(5) He eat-s cakes.

「彼が複数のケーキを食べる。」

(6) It seem-s that he eat-s cakes.

「彼が複数のケーキを食べるように状況が見える。」

(7) He seem-s to eat cakes.

「複数のケーキを食べるように彼が見える。」

(8) *Cakes seem him to eat.

「彼が食べるように複数のケーキが見える。」

ここまでで述べたとおり、英語を例にとっただけでも、主語には3種類の性質がある。この内どれを主語の定義に用いるかは論者ごとに異なる。伝統的な分析では、(ア)と(イ)を重視する。一方、非典型的な主語論者¹は(ウ)を重視している。(ウ)を重視する論者が根拠として挙げるのが、以下の現象である。以下では、伝統的分析では副詞であるので名詞でなく、(ア)主格性を満たさず、また(イ)の述語一致も示さない*there*が、(ウ)統語的主語性の性質を持っている。

(ウ) 統語的主語性

繰り上げ可能性において、*There* は繰り上げ可能である。

(9) There are three pens.

「三本のペンがある。」

(10) It seem-s that there are three pens.

「三つのペンがあるように見える。」

(11) There seem-s to be three pens.

「三つのペンがあるように見える。」

¹ Sigurðsson(2004)はアイスランド語で、統語的な性質を元に、非典型的な主語の存在を論じている。Huddleston & Pullum (2007)は非典型的な主語という用語を直接は使用していないが、主張として主語の性質上統語を重視しているので、筆者の判断で非典型的な主語論者として引用する。

このような理由から、非典型的な主語論者は、(ウ)を重視するのである。(ウ)を主語の定義として採用するためには、(ア)、(イ)の両方もしくは片方を満たさないが、(ウ)は満たす項がその言語で出現しうることを示す必要があるといえる。

1.2 現代標準アラビア語研究における主語の定義

前節では英語を例として、主語の性質には三種類あること、その中でどれを重視するかは論者により違う事、そして(ウ)統語的主語性のみを主語の条件とする論は、その言語の中に(ウ)だけを満たし、他を満たさない項が出現しうることを示さない限り、根拠が弱いことを示した。先行研究では、現代標準アラビア語の主語定義について、(ア)、(イ)が重視されている。なぜならば、アラビア語の主語は基本的に(ア)と(イ)を必ず満たすと観念されてきたからである。Abdul-Raof(1998)は、現代言語学の視点から、統語的主語性も主語の性質であることを認めているが、しかし重視しているのは(イ)述語との一致である。Abdul-Raof(1998)は、主語の性質について以下に述べている。

(ア) 形態論的性質

基本的に格変化のある語は主語の場合主格である。一方、これを対格や属格に変えると非文である。

- (12) t-anām-u l-bint-u.
3FS-sleep-3FS Def-girl-NOM

「その少女が寝る。」

- (13) * t-anām-u l-bint-a.
3FS-sleep-3FS Def-girl-ACC

「その少女が寝る。」

- (14) * t-anām-u l-bint-i.
3FS-sleep-3FS Def-girl-GEN

「その少女が寝る。」

しかし、例外として、否定詞*lā*の直後、および強調節標識*inna*や補文節標識*anna*の直後では主語であっても対格を取る。そうであるので、主語が主格だと非文である。否定詞*lā*を例にとる。

- (15) lā bint-an t-anām-u.
NEG girl-ACC 3FS-sleep-3FS

「どの少女も寝ない。」

- (16) lā bint-un t-anām-u.
NEG girl-NOM 3FS-sleep-3FS

「どの少女も寝ない。」

(イ) 述語支配

述語動詞は、特定の主語接辞により主語の人称、文法性、数に一致する。例として、主語が文法的男性単数の時に、三人称女性単数主語対応形を使うと非文である。

- (17) *y-anām-u* *l-walad-u.*
 3MS-sleep-3MS Def-boy-NOM

「その少年が寝る。」

- (18) **t-anām-u* *l-walad-u.*
 3FS-sleep-3FS Def-boy-NOM

「その少年が寝る。」

(ウ) 統語的性質

(ウ) -1 同一指示主語が連続する時省略可能である

- (19) *ḍarab-a* *zayd-un* *kalb-a-lu* *wa rajaṣ-a* *ʔilā* *bayti-hi.*
 hit-3MS MN-NOM dog-ACC-3MS and go back-3MS to house-3MS

「ザイドが彼の犬を殴って、(ザイドが) 彼 (ザイド) の家に戻った。」

(ウ) -2 動名詞句に置き換えた場合に主語は動名詞の直後に来る。

Wright(1987:113-115)では主語の性質として、二項述語動詞の定動詞節を動名詞句化した際に、定動詞節の主語と目的語を保持したまま、動名詞句内で表現する方法があると記載している²。これは、筆者の判断では、統語的操作の一環として(ウ)に属する。元となる定動詞節からなる例文を以下に示す。

- (20) *t-aqtul-u* *fāṭimat-u* *zayd-an.*
 3FS-kill-3FS FN-NOM MN-ACC

「ファーティマがザイドを殺す。」

この主語*fāṭimat-u*と、目的語*muḥammad-an*を維持したまま、上の文を動名詞句化した場合以下になる。主語は動名詞の直後に属格で現れ、目的語は主語の後に前置詞*li*を伴って現れる。

- (21) *qatl-u* *fāṭimat-a li* *zayd-in.*
 killing-NOM FN-GEN to MN-GEN

「ファーティマがムハンマドを殺すこと。」

(ウ) -2 疑問文にした場合に疑問代名詞となった主語(と直接目的語)は先頭に出る

- (22) *y-anām-u* *zayd-un.*
 3MS-sleep-3MS MN-NOM

「ザイドが寝る。」

- (23) *man* *y-anām-u?*
 who 3MS-sleep-3MS

「誰が寝る？」

²渡辺(2009:118)は英語でも平行する現象があることを示している。

(ウ) -2 主語句は繰り上げ可能である
 例文(24)を補文に繰り込んだ例文(25)から、補文節内の主語を繰り上げると例文(26)になる。

(24) y-anām-u l-walad-u.
 3MS-sleep-3MS Def-boy-NOM

「その少年が寝る」

(25) y-abd-ū ?anna l-walad-a y-anām-u.
 3MS-seem-3MS COMP Def-boy-NOM 3MS-sleep-3MS

「その少年が寝るように見える。」

(26) y-abd-ū l-walad-u ?anna-hu y-anam-u.
 3MS-seem-3MS Def-boy-NOM COMP-3MS 3MS-sleep-3MS

「その少年が寝るように見える。」

以上述べたような性質が、Abdul-Raof(1998)、Wright(1987)による、アラビア語の主語の性質である。ここで注目されるのは、(ウ)のみを満たす項は現代標準アラビア語では現れないと観念されていることである。それ故にAbdul-Raof(1998)は、アラビア語の主語は常に動詞と一致すると述べている。この場合、(ウ)のみをことさらに重視する非典型的な主語仮説は、標準アラビア語の分析には不適切である。なぜなら英語と違い根拠がないからである。しかし、実際には現代標準アラビア語でも、非典型的な主語仮説を支持する、(ウ)しか満たさない項の出現が見られる。それを以下に示す。

2. 現代標準アラビア語での非典型的な主語の例

1.1で述べた通り、英語では(ウ)統語的主語性のみを満たす項が出現しうるために、主語の定義として(ウ)のみを重視する論の根拠があるが、1.2で述べた通り、現代標準アラビア語では、先行研究に従う限り、そのような論の根拠がない。しかし、筆者が2014年度に行った調査では、*yumkinu*“可能である”において、(ウ)統語的主語性のみを満たす項が出現すると捉えられる現象が確認された。

*yumkinu*の主語は、先行研究では動名詞・補文節である(Parkinson 2008)。主格性と、述語との一致の双方を満たすのが、動名詞・補文節であるからである。

(27) y-umkin-u li muḥammad-ini n-nawm-u.
 3MS-be possible-3MS for MN-GEN Def-sleeping-NOM

「ムハンマドにとって眠ることが可能である」

(28) y-umkin-u li muḥammad-in ?an y-anām-a.
 3MS-be possible-3MS for MN-GENCOMP 3MS-sleep-3MS

「ムハンマドにとって眠ることが可能である」

この、主格性と述語との一致で主語を判断する根拠には、Abdul-Raof(1998)に見られるような現代標準アラビア語の主語は (ア) 主格性や (イ) 述語との一致で定義でき、(ウ) 統語的主語性を特に見る必要がないという前提がある。

しかし、筆者は後藤(2014)で、*yumkinu*では疑問文で行為者が主語性を示すと指摘した。そこで挙げた考えを元に、統語的指標を用いて、アンケートで主語性を調査した2014年の筆者の調査に従えば、やはり行為者が(ウ) 統語的主語性を示す。しかし行為者は(イ) 述語一致主語性を示さない。それゆえ、現代標準アラビア語でも、(ウ) のみを重視する論の根拠がある。英語の例に倣い、現代標準アラビア語でも(ウ) のみを主語の定義とするというのが筆者の主張である。それを以下に示す。主語の定義に用いる統語的性質は以下の四つである。

(ウ) -1 補文節から繰り上げ可能なのは行為者項と動名詞・補文節項のどちらか

(ウ) -2 法動詞節を対応する法動名詞句に書き換えたとき、法動名詞の主語が行為者か、実質的事態を表す動名詞か

(ウ) -3 同一主語連続時省略可能性を行為者と動名詞・補文節のどちらの項が示すか

(ウ) -4 行為者項が疑問詞の時、疑問詞単独で文頭に出るか、前置詞+疑問詞の形で出るか

この章では量的データを中心に扱い(ただし、量的データの解釈に必要な最低限の質的データは用いる)、点数で行為者項主語用法と、動名詞・補文節項主語用法のどちらが、各動詞の各性質ごとに、優勢であるかを見た結果、すべての動詞で、動名詞・補文節項主語用法だけでなく、行為者項主語用法が見られることを示す。そして、後者が前者よりも頻出していることを示し、Parkinson (2008)はじめとして既存の研究が前提としてきた、動名詞・補文節が主語であるという主張を批判する。

今回の論文で取り上げる話者は、以下の生え抜き話者 11 名である。表は以下の通りになる³。

³ 筆者による調査協力者とのコンタクトに際して、調査協力者の所属機関の責任者として筆者と調査傾掠者との仲立ちをして下さった、筑波大学北アフリカ研究センターの岩崎真紀先生と東京大学工学部日本語教育センターの古市由美子先生、および調査協力者の方々、そしてその他すべての傾掠者の方々に深い感謝の意を表す。

表 1 生え抜き話者の詳細

	出生地	生育地	家庭言語	教育言語	備考
シリア話者 1 (以下 Sy1)	シリア国、ホムス	小学校から高校までシリア国ホムス、大学からダマスカス	アラビア語 (シリア方言)	アラビア語 (現代標準アラビア語)	日本で留学生、女性
シリア話者 2 (以下 Sy2)	シリア国、イドリブ、アルマナズ地区	小学校から高校まで、アルマナズ地区、大学からアレppo	アラビア語 (シリア方言)	アラビア語 (現代標準アラビア語)	日本で留学生、男性
シリア話者 3 (以下 Sy3)	シリア国、アレppo	シリア国、アレppo	アラビア語 (シリア方言)	アラビア語 (現代標準アラビア語)	現在大学でアラビア語教授を行う。女性。
シリア話者 4 (以下 Sy4)	シリア国、アレppo	シリア国、アレppo	アラビア語 (シリア方言)	アラビア語 (現代標準アラビア語)	男性
エジプト話者 1 (以下 Eg1)	エジプト国、カイロ	小学校から大学までエジプト国カイロ	アラビア語 (カイロ方言)	アラビア語 (現代標準アラビア語) と英語 (現代標準英語)	エジプトの大学の大学院生、女性。
サウジアラビア話者 1 (以下 Sa1)	サウジアラビア国、マッカ	小学校から高校までサウジアラビア国マッカ、大学は日本国東京	アラビア語 (ヒジャーズ変種)	高校までアラビア語 (現代標準アラビア語)、大学は日本語 (現代標準日本語)	アラブの準政府系の機関で働く。男性。

サウジアラビア話者 2 (以下 Sa2)	回答なし (調査票を渡した筆者の知人談ではサウジアラビア)	回答なし (おそらく高校までサウジアラビア国? 現在大学は日本国、東京)	回答なし (おそらくアラビア語のサウジアラビア内の変種)	回答なし (おそらく高校までアラビア語、より正確には現代標準アラビア語?)	筆者の知人と同一の大学に所属しており、知人が筆者に協力し代わりに調査票を渡した。男性。
サウジアラビア話者 3 (以下 Sa3)	サウジアラビア国、ジュバイル	少なくとも高校までサウジアラビア国ジュバイル、現在大学は日本国、東京	アラビア語 (ジュバイル変種)	アラビア語 (現代標準アラビア語) と英語 (現代標準英語)	筆者の知人と同一の大学に所属しており、知人が筆者に協力し代わりに調査票を渡した。名前から推測するに女性。
サウジアラビア話者 4 (以下 Sa4)	回答なし (調査票を渡した筆者の知人談ではサウジアラビア)	回答なし (おそらく高校までサウジアラビア国? 現在大学は日本国、東京)	回答なし (おそらくアラビア語のサウジアラビア内の変種)	回答なし (おそらく高校までアラビア語、より正確には現代標準アラビア語?)	筆者の知人と同一の大学に所属しており、知人が筆者に協力し代わりに調査票を渡した。男性。
オマーン話者 1 (以下 Om4)	オマーン国	小学校から少なくとも高校までオマーン、現在大学は日本	アラビア語 (オマーン変種)	アラビア語 (現代標準アラビア語) と英語 (現代標準英語)	筆者の知人と同一の大学に所属しており、知人が筆者に協力し代わりに調査票を渡した。男性。
UAE 話者 1 (以下 UAE1)	アラブ首長国連邦、ドバイ国	小学校から少なくとも高校まで、アラブ首長国連邦ラアスルハイマティ国。	アラビア語 (ラアスルハイマティ変種)	アラビア語 (現代標準アラビア語) と英語 (現代標準英語)	筆者の知人と同一の大学に所属しており、知人が筆者に協力し代わりに調査票を渡した。性別不詳。

生え抜き群 11 名とも、少なくとも筆者が得たデータに従えば、高校まで現代標準アラビア語での教育を受けている。また、アラブ規範伝統文法学の訓練を受けているわけでもない。また、地域も、エジプト、サウジアラビア、シリア、アラブ首長国連邦 (UAE)、オマーンと分散している。よって、筆者は、この 11 名の調査時点での共時的イディオレクトに共通するものを、現代の一般的な現代標準アラビア語使用層 (アラブ規範伝統文法学の訓練を受けていないが、高校程度まで現代標準アラビア語での教育を受けて終了した人間) が使用する、現代標準アラビア語通用変種の近似の候補として、使用してかまわないと考える。

実際の表では、生え抜き群の中でも、予備調査で典型的動詞のテストをした際に、古典文法と回答が一致した話者のみ、*yumkinu* での調査結果を載せている。また、質問の例文について、定冠詞の有無や人名の格変化などの間違いを途中で修正しつつ調査したが、それについては結果に影響しない者として、最終結果の例文のみのせる。

具体的な調査の手法としては、質問票を用いた。質問票に、上記の 5 つの指標に基づいて筆者が作成した例文の選択肢を挙げ、基本は○と×で答えてもらった。しかし、必要ある際は、その他の記号も使い、◎、○、○~△、△、△~×、×の記号を用いてもらった。以下に基準を示す。

- ◎ : ○が複数ある際にもっとも容認性が高いもの
- : 完全に容認可能
- ~△ : ○と△の間
- △ : 容認可能だが問題あり
- △~× : △と×の間
- × : 完全に不可

また、ある話者が最も容認性が高いと判断した選択肢は、最高容認度を獲得したとみなし、以下の記号を付けた。

!=最高容認度獲得

数値について述べる。数値は以下の基準で算定されている。

- 1 ○数は、◎と○の数
- 2 最高容認度獲得数は!の数
- 3 点数は、◎と○=1、○~△=0.75、△=0.5、△~×=0.25、×=0 とした合計。

また、最後に、以下のすべての表では、ローマ数字の i が (ア) 形態論的主語性、ii が (イ) 述語支配主語性、iii が (ウ) 統語的主語性に対応するのである。

2.1 (ウ) -1 繰り上げ

まず、行為者項と動名詞項を使った例文(29)を補文節化した上で、そこからの繰り上げを見る。行為者項を繰り上げると(30)となる。一方動名詞項を繰り上げると(31)になる。

(29) y-umkin-u	li	muhammad-ini	dh-dhahāb-u	?ilā
3MS-be possible-3MS	for	MN-GEN	Def-going-NOM	to

l-jabal-i.
Def-mountain-GEN

「ムハンマドにとって山に行くことが可能である。」

- (30) y-abd-ū muḥammad-un ʔanna-hu.
3MS-seem-3MS MN-NOM COMP-3MS
- y-umkin-u-hu dh-dhahāb-u ʔilā l-jabal-i.
3MS-be possible-3MS-3MS Def-going-NOM to Def-mountain-GEN

「山に行くことを出来るようにムハンマドが見える。」

- (31) y-abd-ū dh-dhahāb-u ʔilā l-jabal-i
3MS-seem-3MS Def-going-NOM to Def-mountain-GEN
- ʔanna-hu y-umkin-u li muḥammad-in.
COMP-3MS 3MS-be possible-3MS for MN-GEN

「ムハンマドにとって可能であるように山に行くことが見える。」

続いて、動名詞の代わりに補文節を用いた以下の文を考える。行為者項を繰り上げると(33)、補文節項を繰り上げると(34)である。

- (32) y-umkin-u li muḥammad-in
3MS-be possible-3MS for MN-GEN
- ʔan y-adhhab-a ʔilā l-jabal-i.
COMP 3MS-go-3MS to Def-mountain-GEN

「ムハンマドにとって山に行くことが可能である。」

- (33) y-abd-ū muḥammad-un ʔanna-hu
3MS-seem-3MS MN-NOM COMP-3MS
- y-umkin-u-hu ʔan y-adhhab-a
3MS-be possible-3MS-3MS COMP 3MS-go-3MS
- ʔilā l-jabal-i.
to Def-mountain-GEN

「山に行くことを出来るようにムハンマドが見える。」

- (34) y-abd-ū ʔan y-adhhab-a ʔilā l-jabal-i
3MS-seem-3MS COMP 3MS-go-3MS to Def-mountain-GEN
- ʔanna-hu y-umkin-u li muḥammad-in.
COMP-3MS 3MS-be possible-3MS for MN-GEN

「ムハンマドにとって可能であるように山に行くことが見える。」

以下が行為者項、動名詞項、補文節項のそれぞれの繰り上げ可能性の表である。

表 2 yumkinu において行為者項と動名詞項のどちらが繰り上げ可能か (話者付)

繰り上げ可能な項	Sy1	Sy2	Sy3	Sy4	Eg1	Sa1	Sa3	Sa4	Oml	UAE1	○数	!数	点数
(30) 行為者	×!	○!	△!	○!	○!	×!	○!	○!	△!	△!	5	10	6.5
(31) 動名詞	×!	×	△!	×	○!	×!	×	×	×	△!	1	5	2

表 3 yumkinu において行為者項と補文節項のどちらが繰り上げ可能か (話者付)

繰り上げ可能な項	Sy1	Sy2	Sy3	Sy4	Eg1	Sa1	Sa3	Sa4	Oml	UAE1	○数	!数	点数
(33) 行為者	△ ~ ×!	○!	△!	○!	○!	△!	○!	○!	△!	△!	5	10	7.25
(34) 補文節	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	0

まず、動名詞項使用時と、補文節項使用時で、行為者項との数値上の容認度の関係が違
う。動名詞項使用時は、行為者項主語：動名詞項主語は、○数で 5:1、最高容認度獲得数で
10:5、点数で 6.5:2 である。行為者項使用時は、行為者項主語：動名詞項主語は、○数で 5:0、
高容認度獲得数で 10:0、点数で 7.25:0 である。この場合、どちらのデータを、動名詞・補
文節項の主語性を見るのに重視すべきか、それともどちらも重視すべきだろうか。

この量的データを見る際に、注意しなければならないことがある。栗原・松山(2001:24-27)
は、英語で補文節が文頭の主語や、非文末の目的語に来にくいという事実を指摘しており、
その理由について、補文節は対応する動名詞に比べて、主語や目的語を含むなど認知的に
負荷がかかりやすいことなどを挙げている。

栗原・松山(2001:24-27)の記述から筆者が推測するに、補文節には通言語的に統語的な制
約があり、文頭 (ヘッド後置型) か、文末 (ヘッド前置型) に来やすい。繰り上げの主語
は、アラビア語の場合 VS 語順なので、このどちらでもない。そのことから、アラビア語で、
主語に動名詞が来ることの出来ても、補文節が来ることの出来ない場合があることは予想
可能である。そうであるので、行為者項と動名詞・補文節項のどちらが主語であるかを見
る際は、行為者と動名詞を比較した結果をまず見るべきであると考え。補文節項の場合
は、主語であっても、それとは別に上記の制約により、繰り上げなどの操作が許されない

li fāṭimat-a
for FN-GEN

「ペルシア語を話すことがファーティマに可能であること。」

(38) ʔanā ʔ-aʕrif-u ʔimkān-a fāṭimat-a
I 1SG-know-1SG being possible-ACC FN-GEN

li taḥadduth-i l-luḡhat-i l-fārisīyat-i.
for talking-GEN Def-language-GEN Def-Persian-GEN

「ファーティマがペルシア語を話すことを出来ることを私は知っている。」

(39) ʔanā ʔ-aʕrif-u ʔimkān-a taḥadduth-i l-luḡhat-i
I 1SG-know-1SG being possible-ACC talking-GEN Def-language-GEN

l-fārisīyat-i li fāṭimat-a
Def-Persian-GEN for FN-GEN

「ペルシア語を話すことがファーティマに可能であることを私は知っている。」

そして、(38)と(39)の容認性判断についての回答結果が以下の表6である。表6の選択肢(a)が(38)、(b)が(39)である。

表 4 行為者と動名詞のどちらが *yumkinu* の法動詞 *ʔimkāna* の主語か

yumkinu の動名詞 ʔimkāna の主語	Sy1	Sy2	Sy3	Sy4	Eg1	Sa1	Sa2	Sa3	UAE	○数	!数	点数
(38) 行為者	○!	○!	×	△!	○!	×!	×	○!	○!	5	7	5.5
(39) 動名詞	×	×	△!	×	×	×!	○(記号 ◎)!	×	△~ ×	1	3	1.75

ここでは、動名詞項しか現れないので、動名詞項の主語性から、動名詞・補文節項全体の主語性を推定することになる。

この結果から見て取れるのは、以下の三点である。

1 両者の回答に×を付けた話者が一名いるが⁴、その他の話者は何らかの形で両者に差を

⁴ 質的データによると、この話者は、*yumkinu* の動名詞は別の語を用いると回答したので、質問自体につ

付けた

2 何らかの形で両者に差分を設けた話者の間では、○数でも、最高容認度獲得数でも、行為者項主語（動名詞項目的語）を認めた話者も、動名詞項主語（行為者項目的語）を認めた話者もいる。

3 数値で、行為者項主語、動名詞項主語、どちらの用法が優勢なのかを比べると、○数、最高容認度獲得数、点数のすべてで、行為者項主語の回答が、動名詞項主語の用法に優勢である。

このことから、この指標について言えば、(ウ) -1 の指標と同じ、二つのことが言える。

- 1 行為者項と、動名詞項（動名詞・補文節項）は、双方が主語性を持つ
- 2 しかし、より主語性が強いのは行為者項である

よって、この指標について、筆者がこの章に述べた主張と合致する結果が出た。行為者項と動名詞・補文節項は、双方 *yumkinu* の主語としての用法を持つが、行為者項を主語とする用法が優勢である。

2.3 (ウ) -3 疑問文の構成

この指標で何が問題になるかという点、行為者項が疑問詞である時、文頭で単独で疑問詞が出る（主語、直接目的語）か、前置詞+疑問詞（間接目的語、付加項）であるかの違いである。ここでは、疑問詞が単独で出れば行為者項は主語（動名詞・補文節は直接目的語であると推定可能）、前置詞付で出れば行為者項は付加項（動名詞・補文節は主語であると推定可能）とする。行為者項と動名詞項を使った場合、そして行為者項と補文節項を使った場合、をそれぞれ別に扱う。

まず、行為者項と動名詞項を使った場合、疑問文への答えの文は以下のようになる。

(29) *y-umkin-u* *li* *muḥammad-ini* *dh-dhahāb-u* *ʔilā*
 3MS-be possible-3MS for MN-GEN Def-going-NOM to

l-jabal-i.
 Def-mountain-GEN

「ムハンマドにとって山に行くことが可能である。」

この行為者 *muḥammad-ini* を質問する際、疑問詞である行為者項 *man* “誰” を単独で疑問詞として文頭に出すのが行為者項主語の用法、対して前置詞付で出すのが、行為者項が付加項の用法である。

(40) *man* *y-umkin-u-hu* *dh-dhahāb-u* *ʔilā* *l-jabal-i?*
 who 3MS-be possible-3MS-3MS Def-going-NOM to Def-mountain-GEN

かった語彙に問題があった。

「誰が山に行くことを出来るか？」

(41) man y-umkin-u la-hu dh-dhahāb-u ?ilā
 who 3MS-be possible-3MS for-3MS Def-going-NOM to

l-jabal-i?
 Def-mountain-GEN

「誰が山に行くことを出来るか？」

(42) man y-umkin-u dh-dhahāb-u ?ilā l-jabal-i?
 who 3MS-be possible-3MS Def-going-NOM to Def-mountain-GEN

「誰が山に行くことを出来るか？」

(43) li man y-umkin-u dh-dhahāb-u ?ilā
 for who 3MS-be possible-3MS Def-going-NOM to

l-jabal-i?
 Def-mountain-GEN

「誰にとって山に行くことが可能であるか？」

次に、行為者項と補文節項を使った場合には、疑問文に対応する答えの文は以下になる。

(32) y-umkin-u li muḥammad-in
 3MS-be possible-3MS for MN-GEN
 ?an y-adhhab-a ?ilā l-jabal-i.
 COMP 3MS-go-3MS to Def-mountain-GEN

「ムハンマドにとって山に行くことが可能である。」

この、行為者項 *muḥammad-in* を開く時、疑問詞である行為者項 *man* “誰”を単独で文頭に出すのが行為者項主語の用法、対して前置詞付で出すのが、行為者項が付加項の用法である。前者を(a)、後者を(b)とする。

(44) man yumkinu-hu ?an y-adhhab-a ?ilā l-jabal-i?
 who can-3MS COMP 3MS-go-3MS to Def-mountain-GEN

「誰が山に行くことを出来るか？」

(45) man yumkinu la-hu ?an y-adhhab-a ?ilā l-jabal-i?
 who can for-3MS COMP 3MS-go-3MS to Def-mountain-GEN

「誰が山に行くことを出来るか？」

(46) man yumkinu ?an y-adhhab-a ?ilā l-jabal-i
 who can COMP 3MS-go-3MS to Def-mountain-GEN

「誰が山に行くことを出来るか？」

(47) li man y-umkin-u ʔan y-adhhab-a
 for who 3MS-be possible-3MS COMP 3MS-go-3MS

ʔilā l-jabal-i
 to Def-mountain-GEN

「誰にとって山に行くことが可能であるか？」

生え抜き群の中で、予備調査に合格した 10 名にこの調査を行ってもらった。その結果を以下に示す。結果として、動名詞項使用時と、補文節項使用時で一つの大きな違いがある。動名詞を使用した際は、(43)の前置詞 li と疑問詞 man の連続が文頭に来る選択肢に○を付けた話者がいたのに対し、補文節項使用時は、(47)の前置詞 li と疑問詞 man の連続が文頭に来る選択肢に○を付けた話者は一人もいなかった。

表 5 動名詞使用 yumkinu 構文の疑問詞行為者 man の語順 (話者付)

man の語順	Sy1	Sy2	Sy3	Sy4	Eg1	Sa1	Sa2	Sa3	Sa4	UAE1	○数	!数	点数
(40) 文頭に単独で出現	◎!	○!	○!	○!	○!	× (○ → ×)	○!	○ (記号 ◎)!	○!	○!	9	9	9
(41) 文頭に単独で出現	○	×	×	×	○!	○!	△	○ (記号 ◎)!	△	○~△	4	3	5.75
(42) 文頭に単独で出現	×	×	×	△ ~ ×	×	×	×	×	×	×	0	0	0.25
(43) 文頭の前置詞 li の直後に後続して出現	○	×	×	△	×	×	×	○ (記号 ◎)!	×	△~×	2	1	2.75

表 6 補文節使用 yumkinu 構文で行為者項が疑問詞の時のふるまい (話者付)

man の 語順	Sy1	Sy2	Sy3	Sy4	Eg1	Sa1	Sa2	Sa3	Sa4	UAE1	○ 数	! 数	点数
(44) 文 頭に単 独で出 現	◎!	○!	○!	○!	○!	×	◎!	○ (記号 ◎))!	○!	○!	9	9	9
(45) 文 頭に単 独で出 現	○	×	×	△	○!	○!	○!	○ (記号 ◎))!	×	○!	6	5	6.5
(46) 文 頭に単 独で出 現	×	×	×	○!	○!	×	△	×	×	○~△	2	2	3.25
(47) 文 頭の 前置詞 li の直後 に後続 して出 現	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	0	0	0.5

このことから、わかった点についてまとめる。まずは、行為者項と動名詞項を用いた場合の結果から読み取った点が以下になる。

1 疑問詞行為者項を単独で先頭に出す用法を容認した話者も、前置詞+疑問詞の形で使った話者も両方いた

2 しかしその内訳をみると、行為者項はすべての話者が、単独でそれを先頭に出す用法を容認した。一方、前置詞+疑問詞の形で使った話者はシリア話者 1 とサウジアラビア話者 3 のみである

3 前置詞+疑問詞の形で疑問詞行為者項を表示する用法だけを容認した話者は一人もいない。この用法を容認したシリア話者 1 とサウジアラビア話者 3 も、単独での最高容認度を与えなかった。シリア話者 1 は(a-1)に最高容認度を与えた。サウジアラビア話者 3 は(a-1), (a-2), (d)の三つに最高容認度を与えた。

4 疑問詞行為者項が単独で先頭に出る三選択肢の中では、(a-1)がもっとも容認度が高かった。(a-2)がこれに続いた⁵。この三つの中では(a-3)の容認性が一番低かったし、(d)よりも低かった。

一方、動名詞項に代わって補文節項を用いた、下の表からは以下のことがわかる。

1 動名詞を使った場合と違い、疑問詞行為者項を、前置詞+疑問詞の形で用いた話者は一人もいない。

2 疑問詞行為者項が、疑問詞単独で文頭に出た三選択肢の中で、数値で見ると、○数、最高容認度獲得数、点数のすべてにおいて、(a-1)の容認性が一番高かった。続いて、(a-2)が容認度が高く、最後に(a-3)の順番である。

3 (a-3)の選択肢の相対的容認度が低いのは動名詞使用時と変わらないが、絶対的な容認性は、動名詞使用時よりも、○数、最高容認度獲得数、点数のすべてで上回った。

4 (a-3)の選択肢の数値から見た許容度が、(d)を上回った。

以上のことから、行為者項と、動名詞・補文節項のどちらが主語かについて、以下のよう
に結果をまとめることが出来る。

1 動名詞使用の場合は、行為者項が主語である用法と、付加項である用法の双方が見られた。すなわち、動名詞項が直接目的語であると非常に強く推定できる用法と、主語であると非常に強く推定できる用法の双方があった。

2 補文節使用の場合は、行為者項が主語である用法しか容認されなかった。そのため、この場合、補文節項は直接目的語と非常に強く推定できる用法しかない。

3 動名詞使用の場合でも、行為者項が付加項である用法のみを許容した話者は一人もいなかった。

以上のことから、*yumkinu* は行為者項と動名詞・補文節項のどちらが主語かについて以下の
ことが言える。

1 行為者項と、動名詞項（動名詞・補文節項）は、双方に *yumkinu* の主語である用法がある

2 しかし、行為者項を主語とする用法が圧倒的に強い。とりわけ補文節使用時は、行為者項を主語とする用法しか見られない。

2.4 (ウ) -4 同一主語連続時省略可能性

ここでは、行為者項と動名詞・補文節項のそれぞれに、同一主語連続時の省略が適用さ

⁵ 後藤(2014)で、チュニジア出身話者が述べた容認度の順番と一致する。この話者も、*man yumkinu-hu* を最高容認度に値させた。

れた例文を用意し、それぞれの容認度から、行為者項主語用法と、動名詞項主語用法のどちらが優勢かを探る。その際、問題となる *yumkinu* の前後を、典型的主語を取るだろうと予想される動詞で固める。

例文(48)では、行為者項 *muḥammad-un* が、最初の述語 *qābal-a* だけでなく、次の述語動詞 *kān-a yumkinu-hu*、その次の述語動詞 *rajaʕ-a* の主語でもある。*kān-a yumkinu-hu* は、*yumkinu* に存在述定動詞 *kāna* を付けた、過去の状態を示す。以下に示す通り、最初の述語以外は、主語が省略されている。一方例文(49)では動名詞項が主語である。ここでは最初に出ている動名詞項 *dh-dhahāb-u* が、最初の述語動詞 *kān-a* だけでなく、その次の述語 *lam y-umkin* とその次の述語 *kān-a* の主語でもある。*lam y-umkin* は *yumkinu* の過去否定である。

(48)	<i>qābal-a</i> meet-3MS	<i>muḥammad-un</i> MN-NOM	<i>ʕuthmān-a</i> MN-ACC		
	<i>wa</i> and	<i>kān-a</i> be-3MS	<i>yumkinu-hu</i> can-3MS	<i>t-taḥaddhuth-u</i> Def-talking-NOM	<i>maʕa-hu</i> with-3MS
	<i>walākin</i> but	<i>rajaʕ-a</i> go back-3MS	<i>ʔilā</i> to	<i>bayti-hi.</i> house-3MS	

「ムハンマドはウスマーンに会った。そして彼は彼と話すことを出来た。しかし彼は彼の家に戻った。」

(49)	<i>kān-a</i> be-3MS	<i>dh-dhahāb-u</i> Def-going-NOM	<i>ʔilā</i> to	<i>l-jabal-i</i> Def-mountain-GEN	<i>ʕaʕb-an</i> difficult-ACC
	<i>wa</i> and	<i>lam</i> NEG	<i>y-umkin</i> 3MS-be possible	<i>li</i> for	<i>muḥammad-in</i> MN-GEN
	<i>walākin</i> but	<i>kān-a</i> be-3MS	<i>mumtiʕ-an</i> pleasure-ACC	<i>li</i> for	<i>ʕuthmān-a.</i> MN-GEN

「山に行くことは難しかった。そしてムハンマドにとって不可能だった。しかし、ウスマーンにとってうれしかった。」

例文(50)では行為者項が主語である。ここでは最初に出ている行為者項 *muḥammad-un* が、最初の述語 *qābal-a* 次の述語動詞 *kān-a yumkinu-hu*、その次の述語動詞 *rajaʕ-a* の主語でもある。*kān-a yumkinu-hu* は、*yumkinu* に存在述定動詞 *kāna* を付けた、過去の状態を示す。一方例文(51)では、補文節項が主語である。ここでは最初に出ている補文節項 *ʔan y-adhhab-a* が、最初の述語動詞 *kān-a* だけでなく、その次の述語 *lam y-umkin* とその次の述語 *kān-a* の主語でもある。*lam y-umkin* は *yumkinu* の過去否定である。

(50)	<i>qābal-a</i> Meet-3MS	<i>muḥammad-un</i> MN-NOM	<i>ʕuthmān-a</i> MN-ACC		
	<i>wa</i> and	<i>kān-a</i> be-3MS	<i>yumkinu-hu</i> can-3MS	<i>ʔan</i> COMP	<i>y-atahaddath-a</i> 3MS-talk-3MS
					<i>maʕa-hu</i> with-3MS

walākin rajaʕ-a ʔilā bayti-hi.
but go back-3MS to house-3MS

「ムハンマドはウスマーンに会った。そして彼は彼と話すことを出来た。しかし彼は彼の家に戻った。」

(51) kān-a ʔan y-adhhab-a ʔilā l-jabal-i ʕaʕb-an
be-3MS COMP 3MS-go-3MS to Def-mountain-GEN difficult-ACC

wa lam y-umkin li muḥammad-in
and NEG 3MS-be possible for MN-GEN

walākin kān-a mumtiʕ-an li ʕuthmān-a.
but be-3MS pleasure-ACC for MN-GEN

「山に行くことは難しかった。そしてムハンマドにとって不可能だった。しかし、ウスマーンにとってうれしかった。」

(48)と(49)、(50)と(51)のそれぞれを比較した結果が表である。結論としては、動名詞項と、補文節項双方とも、同一主語連続時の省略可能性を強く示さず、対して行為者項は省略可能性を強く示した。行為者項と動名詞項では、最高容認度獲得数で、動名詞主語用法を認めた話者がいる。○数では行為者項主語用法しかないが、最高容認度獲得数では一人だけ、動名詞項主語用法があった。行為者項と補文節項との比較でも、最高容認度で同じように一人だけ補文節項主語用法を容認した話者が出た。

表 7 *yumkinu* における行為者項と動名詞項の同一指示主語連続時省略可能性 (話者付)

同一指示主語連続時の省略可能性を示す項	Sy1	Sy2	Sy3	Eg1	Sa3	Om1	UAE1	○数	!数	点数
(48) 行為者	○!	○!	○!	○!	△!	△!	△!	4	7	5.5
(49) 動名詞	×	×	△	△	△ ~ ×	△ ~ ×	△!	0	1	2

表 8 *yumkinu* における行為者項と補文節項の同一指示主語連続時省略可能性 (話者付)

同一指示主語連続時の省略可能性を示す項	Sy1	Sy2	Sy3	Eg1	Sa3	Om1	UAE1	○数	!数	点数
(50) 行為者	○!	○!	○!	○!	△!	△ (最初○)!	○ ~ △!	4	7	5.75
(51) 補文節	×	×	△	×	×	×	○ ~ △!	0	1	1.25

今回は、節末に?an 補文節を置いている (wa の直前まで) のので、補文節は動名詞と同じ位置にないが、その代わりに、補文節が持つ、節末配置制約に違反していない。それ故に、補文節の同一主語連続時省略可能性を吟味できると考える。ここからわかることを以下にまとめる。

- 1 ◦数で述べると、行為者項主語の用法しかない。動名詞も補文節も◦が付いていない。
- 2 最高容認度獲得数で見ると、行為者項主語の用法と、動名詞項主語の用法は両方見られる。しかし、補文節項主語の用法は見られない。
- 3 点数で見ると、行為者項主語、動名詞項主語、補文節項主語の用法がどれも点を得ている。
- 4 全数値で、行為者項主語用法が優勢である

このことから主語について以下のことが言える。

- 1 行為者項と動名詞・補文節項の双方が主語用法を持っているといえる
- 2 行為者項主語用法が優勢である。

しかし、この指標を扱う際に、注意しなければいけないのは、意味が不自然とした話者が、動名詞を主語として同一主語連続時省略可能性を見ようとした例文に多かったことである。意味的に不自然であることから、この指標自体の信用性はやや落ちる。

3 結論

以上4指標すべてで、◦が付く、あるいは最高容認を獲得する、というどちらかの意味で取れば、行為者主語用法と動名詞・補文節主語用法の双方が少なくとも一名以上の話者によって容認されたが、4つのすべての指標で、行為者主語用法が動名詞・補文節主語用法に勝る。*yumkinu* の主語は行為者項である用法が強いことが見て取れる。以上より、*yumkinu* で、以下のことが言える

- 1 先行研究の前提通り、動名詞・補文節項主語用法は確かに存在する
- 2 しかし、筆者の予想通り、行為者項主語用法も存在する
- 3 *yumkinu* においては、四指標を総合的に見ると、行為者項主語用法の方が優勢である

以上より、今までの研究は不十分で、現代標準アラビア語の通用変種では、規範変種とは違い、行為者項主語用法を認める必要がある。すなわち、行為者項は動詞 *yumkinu* の活用と一致せず、主格を取らないが、統語的性質により主語と見做せるため、現代標準アラビア語通用変種には非典型的な主語が存在するという事である。遡って考えると、現代標準アラビア語の主語の定義が (ア) 主格性、(イ) 述語との一致によっていたのは、非典型的な主語

が存在しないと考えられていたためであるので、非典型的の主語が存在すると考えられる今、現代標準アラビア語の研究においても、主語の定義を、(ア) 主格性、(イ) 述語との一致に求めるのではなく、(ウ) 統語的主語性に求める、非典型的の主語仮説を受け入れる必要があると筆者は考える。

4 課題

筆者は(ウ) 統語的主語性のみを満たす項が現代標準アラビア語に出現することを根拠に、現代標準アラビア語でも、非典型的の主語仮説を受け入れて、主語の定義を(ア) 主格性、(イ) 述語との一致に求める仮説から、(ウ) 統語的主語性に求める仮説にシフトすべきと主張した。しかし、非典型的の主語仮説以外に、この現象を説明する手段はあるかどうかを検討すべきである。

梅谷(2015、パーソナルコミュニケーション)や角田(2009)では動詞との一致が主語の性質として使われていた。この見解と、非典型的の主語仮説をはたして折衷できるかどうか検討したい。

5 参考文献

- Abdul-Raof, Hussein (1998) *Subject, theme and agent in Modern Standard Arabic*. Richmond: Curzon Press.
- 後藤智明(2014) 「現代標準アラビア語における動名詞対格yumkinu構文とその非典型的の主語—その広がりの可能性と現象への一考察—」『東京大学言語学論集』第35号. pp41-62
- Huddleston, Rodney and Pullum Geoffrey, K. (2007) 『ケンブリッジ現代英語文法辞典-A students introduction to English grammar』高橋邦年(訳). Singapore: Cambridge University Press.
- 栗原和生・松山哲也(2001) 『補文構造』. 原口庄輔・中島平三・中村棲。川上誓作(編) 英語学モノグラフシリーズ 4. 東京: 研究社
- Parkinson (2008) "Sentence subject agreement variation in Arabic" In Zeinab Ibrahim and Sabaa A.M. Makhlouf (eds.) *Linguistics in an age of globalization- Perspective on Arabic language and teaching*. pp.67-90. Cairo and New York: The American University of Cairo Press.
- 角田太作(2009) 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語—』改訂版. 東京: くろしお出版
- 梅谷博之(2015) パーソナルコミュニケーション
- 渡辺明(2009) 『生成文法-Syntax in Generative Grammar』東京: 東京大学出版会
- Wright, William (1987) 『アラビア語文典下巻』後藤三男訳. 東京: 後藤書房

Subjects in the Modal Verbs in Modern Standard Arabic

Tomoaki Goto

elessar1014@yahoo.co.jp

Keywords: modal verbs, quirky subjects, subjects

Abstract

Subjects are characterized by their case markings, agreements with the predicates, and syntactic features. However, there are disagreements on which traits should be emphasized as the core value to define them. In the description of Indo-European languages, traditional analyses emphasize the importance of (A) case markings, and (B) agreements with the predicates, in contrast to this, non-canonical subject theory propagators emphasize the importance of (C) syntactic features.

In the research of Modern Standard Arabic, there have been only traditional analyses that emphasize the importance of (A) case markings, and (B) agreements with the predicates. That is because there have been no claims of non-canonical subject phenomena in MSA. Abdul-Raof (1998) claims that the most important characteristic of subjects in MSA is agreement with the predicates. Based on this point of view, Parkinson (2008) says that the subject of *yumkinu* “be possible” is verbal nouns or complement clauses.

However, My research shows that the claim that MSA has no non-canonical subjects is not appropriate. In my research using the syntactic features, subjects of *yumkinu* constructions are does rather than verbal nouns or complement clauses. Therefore the traditional analyses which claims the indispensable importance of agreements between subjects and predicates should be renounced.

(ごとう・ともあき 東京大学大学院言語学研究室博士課程)